いふ。太上天皇の吊書に云はく、

眞言の法匠、密教の宗師、邦家其護持に憑り、動植其精念を荷ふ、豈圖らんや、奄嵫未だ迫らず、無常遽に侵す、仁舟棹を廢し、弱子歸を失ふ、嗟呼哀いかな、禪關僻左、函問晩傳、使者奔り赴いて荼毗を相助くること能はず、之を言へば悵と爲る、悵恨曷ぞ已まん、舊窟に思忖して悲凉斷つべし、今遙に單書を寄せて之を吊す、手錄の弟子、入室の桑門、悽愴如何、兼ねて以て旨を達す、

七七日の忌に及びて顏色變ぜず、鬚髮更に生ず。因つて剃除を加へ、衣裳を整へ、山頂を穿ちて底に入ること半里許、石を疊み壇を築き、其上を覆ひて率塔婆を立つ、即ち高野山奥の院是れなり。天安元年十月大僧正を贈らる、眞濟の上表に依る。貞觀六年三月法印大和尚位を贈られ、延喜二十一年十月觀賢の奏請に依りて弘法大師の諡號を賜ふ。

夫れ大師は三代の國師として四海其慶慈を仰ぐ。灌頂の弟子上下萬を以て數へ、傳法の遺弟數百人の多きに及ぶ。著はす所の章疏密軌、十住心論、辨顯密二教論、即身成佛義、理趣經釋、大日經開題、敎王經義記、守護國界主經釋、大日經略釋、金剛頂經略釋、胎藏界私記、金剛界私記、般若心經祕鍵、最勝王經略釋、法華經祕釋、法華經品釋、文鏡祕府等總じて一百四十餘部二百二十餘卷、其餘詩文は性靈集等に見ゆ。繪畫彫刻翰墨の類亦皆後代の範たらざるなく、餘光赫赫として今に衰へず。凡そ一代の偉業筆紙の盡し得る所にあらず、併ながら今は大略を記す所なり。

弘法大師御傳記終

大正四年六月九日印刷
大正四年六月十四日發行

著作權所有

編輯者　御橋惠言
發行者　草村松雄　東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
發行所　日本大藏經編纂會　東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

324
451

324
451

終